



TITLE:

整数表現に関連したゼータ関数について : Bushnell-Reinerの仕事の紹介(群の整数表現及び関連する問題の研究)

AUTHOR(S):

竹ヶ原, 裕元

---

CITATION:

竹ヶ原, 裕元. 整数表現に関連したゼータ関数について : Bushnell-Reinerの仕事の紹介(群の整数表現及び関連する問題の研究). 数理解析研究所講究録 1985, 549: 144-158

ISSUE DATE:

1985-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/98867>

RIGHT:

## 整数表現に関連したゼータ関数について

( Bushnell-Reiner の仕事の紹介 )

北大理 竹ヶ原 裕元

( Yugen-Takegahara )

Solomon のゼータ関数に関しての Bushnell-Reiner による数多くの仕事のうち、ここでは Solomon の予想に関するものと、有限群  $G$  が与えられたときの  $\mathbb{Z}G$  のゼータ関数の計算についての仕事を紹介します。まず、Solomon のゼータ関数の諸性質を見てゆきます。

$\Lambda$ : a  $\mathbb{Z}$ -order in a f.d. semisimpl  $\mathbb{Q}$ -algebra  $A$

$L$ : a full  $\Lambda$ -lattice in a f.g. left  $A$ -module  $V$

定義 ( Solomon のゼータ関数 )  $s$  を複素変数,

$$\zeta_L(s) := \sum_N (L:N)^{-s}, \quad N \text{ は } L \text{ に含まれる full } \Lambda\text{-lattice 全体を動く.}$$

この関数は  $\operatorname{Re}(s) > \dim_{\mathbb{Q}} V$  で確かに収束し、意味を持ちます。特に  $V=A=\mathbb{Q}$ ,  $L=\Lambda=\mathbb{Z}$  とすると、Liemann のゼータ関数,  $F$  を  $\mathbb{Q}$  の有限次拡大体,  $R$  をその整数環として,  $V=A=F$ ,  $L=\Lambda=R$  とするとき,

Dedekind のゼータ関数にそれぞれ一致します。また、

$A = \mathbb{Q}$ ,  $\Lambda = \mathbb{Z}$ ,  $V = \mathbb{Q}^n$ ,  $L = \mathbb{Z}^n$  とすると、

$$\zeta_L(s) = \zeta_{\mathbb{Z}}(s) \cdot \zeta_{\mathbb{Z}}(s-1) \cdots \zeta_{\mathbb{Z}}(s-n+1)$$

$\zeta_{\mathbb{Z}}(s)$  は Riemann のゼータ関数

となっています。

Local case でもゼータ関数が定義されますが、

特に、simple  $\mathbb{Q}_p$ -algebra の maximal  $\mathbb{Z}_p$ -order で定義されるゼータ関数について "Hey's formula" が知られています。

"Hey's formula"

$B := M_n(D)$ ,  $D$  は f.d. division  $\mathbb{Q}_p$ -algebra

$T$ : maximal  $\mathbb{Z}_p$ -order in  $B$

$W$ :  $k$ -copies of simple left  $B$ -module

$M$ : a full  $T$ -lattice in  $W$

$e := \sqrt{\dim_F D}$ ,  $F$  は  $D$  の中心,  $\mathbb{Z}$  の整数環を  $\mathbb{R}$

$$\Rightarrow \zeta_M(s) = \prod_{i=0}^{k-1} \zeta_{\mathbb{R}}(nes - ei), \zeta_{\mathbb{R}}(s) \text{ は Dedekind の}$$

ゼータ関数

一般の場合も、maximal order 上の lattice のゼータ関数は扱い易く ( maximal order は algebra の Wedderburn 分解に関して、simple algebra の

maximal order の直和として表わされる。lattice もそれに従い直和として表わされ、ゼータ関数はこの直和因子のゼータ関数の積になっている。)、次に述べる "Euler product" とともに、ゼータ関数の性質を調べる上で重要な働きをします。

$p$  の添字で  $p$ -進完備化,  $(p)$  の添字で局所化をあらわすと,  $\Lambda_p$  は  $\mathbb{Q}_p$ -algebra  $A_p$  の  $\mathbb{Z}_p$ -order,  $L_p$  は left  $A_p$ -module  $V_p$  の full  $\Lambda_p$ -lattice となり  $\zeta_{L_p}(s)$  が定義され, 同様に,  $\zeta_{L_{(p)}}(s)$  も定義されます。このとき

$$\zeta_{V_p}(s) = \zeta_{L_{(p)}}(s)$$

が示されて, さらに

"Euler product"  $\zeta_V(s) = \prod_p \zeta_{V_p}(s)$  が成り立ちます。

Liemann のゼータ関数, あるいは, Dedekind のゼータ関数の Euler product は知られていますが, これはこの拡張となっています。

$\Gamma$  を  $\Lambda$  を含む maximal order,  $B := \{p: \text{素数} \mid \Gamma_p \neq \Lambda_p\}$  ( $|B| < \infty$ ) とおくと, "Euler product" より

$$\zeta_L(s) = \prod_{p \in B} \zeta_{L_p}(s) / \zeta_{\Gamma_p L_p}(s) \cdot \zeta_{\Gamma L}(s)$$

が得られます。( $\Gamma_p L_p, \Gamma \cdot L$  は  $\Gamma$ -lattice と考える。)

## §1 Solomon の予想

$A, \wedge, V, L$  は先の定義に従うものとします。いま、

$$A = \prod_{i=1}^r A_i, \quad A_i \text{ は Wedderburn component.}$$

$$A_i = M_{n_i}(D_i), \quad D_i \text{ は division } \mathbb{Q}\text{-algebra}$$

$$V_i = A_i V, \quad k_i\text{-copies of simple left } A\text{-module}$$

$$e = \sqrt{\dim_{F_i} D_i}, \quad F_i \text{ は } D_i \text{ の中心, その整数環を } R_i.$$

として、次の関数を定義します。

$$\zeta_V(s) := \prod_{i=1}^r \prod_{j=0}^{k_i e - 1} \zeta_{R_i}(n_i e(s-j)), \quad s \text{ は複素変数}$$

この関数は Dedekind のゼータ関数により定義されていますから、その Euler product により、“p-part” が考えられ、それを  $\zeta_{V,p}(s)$  と表わすと、

$$\zeta_V(s) = \prod_p \zeta_{V,p}(s)$$

と、“Euler product” が考えられます。さらに、

定理 (Solomon [1])

素数から成る有限集合  $B$  があり、

$$\zeta_L(s) = \prod_{p \in B} \zeta_{L,p}(s) / \zeta_{V,p}(s) \cdot \zeta_V(s), \quad \text{特に}$$

$\zeta_{L,p}(s) / \zeta_{V,p}(s)$  は  $\mathbb{Q}$  上  $p^{\mathbb{N}}$  の有理関数である。

“Solomon の予想”

$$\zeta_{L,p}(s) / \zeta_{V,p}(s) \in \mathbb{Z}[p^{-s}]$$

この予想は,  $\Lambda$  が maximal order ならば,  
 "Hey's formula" より,  $\Lambda = \mathbb{Z}G$ ,  $G$  は素数位数の巡回群  
 ならば計算により, それぞれ正しいことが知られて  
 いました。その後, Bushnell-Reiner [1] は, より "強  
 い形" で, 肯定的に, この予想を証明しました。

$\Lambda$ : a  $\mathbb{Z}_p$ -order in a f. d. semisimple  $\mathbb{Q}_p$ -algebra  $A$

$L$ : a full  $\Lambda$ -lattice in a f. g. left  $A$ -module  $V$ .

定理 ( Bushnell-Reiner [1] )

$\Gamma$  を  $\Lambda$  を含む maximal  $\mathbb{Z}_p$ -order とすると,

$$\zeta_L(s) / \zeta_{\Gamma L}(s) \in \mathbb{Z}[p^{-s}]$$

先に述べた事と, この定理より, ただちに,  
 Solomon の予想が解かれます。以下 Bushnell-Reiner  
 による, この定理の証明を, 簡単に説明します。

[証明の概略]

$X = \{M_1, \dots, M_n\}$  を  $V$  の中の full  $\Lambda$ -lattice の同型類  
 の代表全体の集合とします。 ( $|X| < \infty$ )  $M \in X$  に対し  
 て, 次の関数を定義します。  $s$  を複素変数として,

$$\zeta_L(M; s) := \sum (L:N)^{-s}, \quad N \text{ は } M \text{ と同型な } L \text{ に含まれる full lattice を動く。}$$

明らか1=,  $Z_L(s) = \prod_{i=1}^r Z_L(M_i; s)$  を得ます。記号,

$$B := \text{End}_A V, \quad B^\times := \text{Aut}_A V$$

$$\{M:L\} := \{x \in B \mid Mx \leq L\} \quad \dots \quad \mathbb{Z}_p\text{-lattice in } B$$

$$\text{Aut}_A M := \{x \in B \mid Mx = M\} \quad \dots \quad \text{unit group of } \mathbb{Z}_p\text{-order in } B$$

を用いて,  $Z_L(M; s)$  を

$$Z_L(M; s) = \sum (L: Mx)^{-s}, \quad x \text{ は } \text{Aut}_A M \backslash \{M:L\} \cap B^\times \text{ の代表全体を動く.}$$

と変形し, さらに  $V$  の中の任意の full  $\mathbb{Z}_p$ -lattice

$X, Y$  に対して, 新しい index  $(X:Y) = (X:X \cap Y)/(Y:X \cap Y)$

を導入し,  $x \in B^\times$  の norm を,  $\|x\| = (Mx:M)$  ( $M$  は任意

の full  $\mathbb{Z}_p$ -lattice としてよい。) と定義すると,

$$(L: Mx) = (L:M) \cdot (M: Mx) = (L:M) \cdot \|x\|^{-1} \quad \text{より,}$$

$$Z_L(M; s) = (L:M)^{-s} \sum \|x\|^s, \quad x \in \text{Aut}_A M \backslash \{M:L\} \cap B^\times$$

と表わされます。

いま,  $B$  に  $\mathbb{Q}_p$ -space としての位相 ( $\mathbb{Z}_p$ -lattice は 0 の compact open neighborhood) を導入すると,  $B^\times$  はその subset top. で, locally compact な位相群と考えられる。そこで  $B^\times$  の Haar 測度,  $dx$  (この measure を  $\mu^x$ ,  $\mu^x(\text{Aut}_A M)$  は 0 でない有限の値をもつ。) を用い

て,  $Z_L(M; s)$  は,

$$Z_L(M; s) = \mu^*(\text{Aut}_\Lambda M)(L; M)^{-s} \int_{\mathfrak{p}^\times} \Phi_{\{M; L\}}(x) \|x\|^s dx$$

と考えられます。ここで  $\Phi_{\{M; L\}}$  は  $B$  の中での  $\{M; L\}$  の char. function.

補題 (Bushnell-Reiner[1])

$\Phi$  を  $B$  上の Schwartz-Bruhat function (ie locally constant な compact support をもつ複素数値関数) とすると,

$$\{\zeta_L(s)\}^{-1} \int_{\mathfrak{p}^\times} \Phi(x) \|x\|^s dx \in \mathbb{C}[P^s, P^{-s}]$$

証明は, まず  $B$  が simple algebra,  $\Phi$  が  $\text{End}_L(\Gamma L)$  の部分集合  $x + P^f \text{End}_L(\Gamma L)$ ,  $f \geq 0$ , の場合に帰着させ最終的には, "Hermite normal form" 的な行列の操作で証明を与えています。

さて, 補題より,  $\{\zeta_L(s)\}^{-1} Z_L(M; s) \in \mathbb{C}[P^s, P^{-s}]$  が得られますが, 一方定義から,  $\{\zeta_L(s)\}^{-1} Z_L(M; s) \in \mathbb{Z}[\mathbb{P}^\times]$ , (形式的中級数の環) となっていますから, ただちに定理の主張を得ます。



## §2 有限群のゼータ関数

$G$  を有限群,  $\Gamma$  を  $\Lambda = \mathbb{Z}G$  を含む  $\mathbb{Q}G$  の maximal order とすると,  $G$  の位数を割らない素数  $p$  に対して,  $\Lambda_p = \Gamma_p$  となり, Euler product より

$$\zeta_{\Lambda}(s) = \prod_{p \nmid |G|} \zeta_{\Lambda_p}(s) / \zeta_{\Gamma_p}(s) \cdot \zeta_{\Gamma}(s)$$

を得ますから,  $\zeta_{\Lambda}(s)$  の計算は  $\varphi_p(s) = \zeta_{\Lambda_p}(s) / \zeta_{\Gamma_p}(s)$  の計算に帰着します。また, 先の定理の系として,

“ $\zeta_{\Lambda_p}(s)$  は全平面で定義された有理形関数に解析接続される” ことがわかりますが, そのとき次の関数等式に関する定理が, simple  $\mathbb{Q}_p$ -algebra 上で定義された zeta integral の関数等式から導かれます。

定理 (Bushnell-Reiner [1])

$$\zeta_{\Lambda_p}(s) / \zeta_{\Lambda_p}(1-s) = (\Gamma_p : \Lambda_p)^{1-2s} \cdot \zeta_{\Gamma_p}(s) / \zeta_{\Gamma_p}(1-s) \quad \text{—}$$

定理から,  $\varphi_p(s) = (\Gamma_p : \Lambda_p)^{1-2s} \cdot \varphi_p(1-s)$  が導かれ, これより,  $\varphi_p(s) = \sum_{i=0}^m a_i p^i$ ,  $(\Gamma_p : \Lambda_p) = p^m$  とおくと,  $n=2m$ ,  $a_{2m-i} = a_i \cdot p^{m-i}$ ,  $i=0, \dots, m$  となり,  $\varphi_p(s)$  に関する情報を与えています。実際に  $\zeta_{\Lambda}(s)$  が計算された例としては,  $G$  が位数  $p, p^2$  ( $p$  は素数) の巡回群, 位数  $2p$  ( $p$  は奇素数) の二面体群と, 広中 [1] で示された metacyclic group の場合があります, 以下最初の 2 つの例を紹介します。

(I) 位数が  $p, p^2$  ( $p$  は素数) の巡回群のゼータ関数

ここで述べる内容は Reiner [1] に依ります。以下  $p$  の添字で局所化 (完備化ではなく) を示します。さて,  
 $G = \langle \sigma \mid \sigma^{p^2} = 1 \rangle$ ,  $H = \langle \tau \mid \tau^{p^2} = 1 \rangle$  とおくと, まず,

$\mathbb{Q}G \cong \mathbb{Q} \oplus \mathbb{Q}(\omega_1) \oplus \cdots \oplus \mathbb{Q}(\omega_{p-1})$ ,  $\omega_i$  は 1 の原始  $p$ -乗根  
 であり, maximal  $\mathbb{Z}$ -order は,  $\mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z}[\omega_1] \oplus \cdots \mathbb{Z}[\omega_{p-1}]$  に  
 同型であることがわかります。また,  $\mathbb{Z}_p G$  の full  
 ideal を調べるために, 次の自然な fibre product を  
 考えます。

$$\begin{array}{ccc} \Gamma = \mathbb{Z}_p G & \longrightarrow & S = \mathbb{Z}_p[\omega_n] \\ \downarrow & & \downarrow g_1 \\ \Lambda = \mathbb{Z}_p H & \xrightarrow{g_2} & \mathbb{Z}H, \quad \bar{\mathbb{Z}} = \mathbb{Z}/p\mathbb{Z} \end{array}$$

これより,  $\Gamma = \{(x, y) \in S \times \Lambda \mid g_1(x) = g_2(y)\}$  と表わさ  
 れます。いま  $I$  を  $\Gamma$  の full ideal として,  $I$  に対して  
 $\Lambda$  の full ideal  $J$  を,  $J = \{y \in \Lambda \mid (0, py) \in I\}$  と定義し  
 ます。このとき, 或る,  $g_1((1-\omega_n)^r) = g_2(y)$  を満たす,  
 $r \geq 0$ ,  $y \in J$  があり,  $I = \Gamma((1-\omega_n)^r, y) + (0, pJ)$  と表わさ  
 れます。逆にこのような,  $J, y, r$  に対して,  $\Gamma$  の  
 full ideal  $I = \Gamma((1-\omega_n)^r, y) + (0, pJ)$  が定義されます。  
 この対応により,  $\Gamma$  の full ideal  $I$  は次のデータで,  
 完全に決定されます。

$$I = \Gamma((1-w_n)^r, y) + (0, PJ)$$

(i)  $J$  は  $\Lambda$  の full ideal

(ii)  $r$  は  $g_1((1-w_n)^r) \in g_2(J)$  であるような正整数

(iii)  $y \in J$  は  $g_2(y) = g_1((1-w)^r)$  である mod  $PJ$  の代表

特に,  $\Gamma = \Gamma(1, 1) + (0, P\Lambda)$  より, 上の  $I$  について,

$$(\Gamma: I) = P^r (\Lambda: J)$$

となります。また,  $N_J$  を  $J, r$  が与えられたときの,

$y$  の取りちの数とすると,  $k_J$  を  $g_2(J) = (1-t)^{k_J} \mathbb{Z}H$  で定義するとき,

$$\begin{aligned} N_J &= |J \cap P\Lambda: PJ| = |J: PJ| / |J + P\Lambda: P\Lambda| = p^{P^r-1} / p^{P^{r-1}-k_J} \\ &= p^{k_J} \end{aligned}$$

これより

$$\zeta_r(s) = \sum_J p^{k_J} \sum_{r \geq k_J} \{P^r (\Lambda: J)\}^{-s}$$

さて, この“公式”により  $n=1, 2$  の場合で計算されています。  $n=1$  のときは,  $\Lambda = \mathbb{Z}_p$  で  $J$  は,  $J = p^t \mathbb{Z}_p$ ,  $t \geq 0$  と表わされ,  $t=0 \Rightarrow k_J = 0$ ,  $t \geq 1 \Rightarrow k_J = 1$  だから

$$\begin{aligned} \zeta_r(s) &= \sum_{r \geq 0} P^{-r^r} + P \sum_{t \geq 1} \sum_{r \geq 1} P^{-(1+t)r} \\ &= (1 - P^{-r^r} + P^{1-2r}) \zeta_{\mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z}P\omega_2}(s) \end{aligned}$$

$$\zeta_{\mathbb{Z}_q}(s) = (1 - P^{-r^r} + P^{1-2r}) \cdot \zeta_{\mathbb{Z}}(s) \cdot \zeta_{\mathbb{Z}P\omega_2}(s)$$

が得られます。なお  $n=1$  の場合は Solomon [1],

Bushnell-Reiner [1] でも計算されています。

$n=2$  のとき  $\Gamma$  の full ideal  $I$  は

$$I = T((1-w_1)^m, z) + (0, PJ), \quad z \in J$$

$$J = \bigwedge ((1-w_1)^r, y) + (0, p^{t+1}z_r), \quad r \geq k_{p^t z_r}$$

$$\begin{cases} t=0, r=0 \Rightarrow y=1, & t=0, r \geq 1 \Rightarrow y=0 \\ t \geq 1 \Rightarrow y = 0, p^t, \dots, (p-1)p^t \end{cases}$$

として得られ,  $(T:I) = p^{r+m+t}$ , さらに

$$t=0 \Rightarrow k_J = \text{Min}(r, p-1)$$

$$t=1 \Rightarrow r < p-1 \text{ で } k_J = r$$

$r \geq p-1$  で  $p-1$  個の  $y$  について

$$k_J = p-1, \quad 1 \text{ 個の } y \text{ について}$$

$$k_J = p$$

$$t \geq 2 \Rightarrow k_J = \text{Min}(r, p)$$

となっています。以下計算を示すと,

$$\begin{aligned} J_r(S) &= \sum_{r=0}^{p-1} \sum_{m \geq r} p^r \cdot p^{-(r+m)s} + \sum_{r=p}^{\infty} \sum_{m \geq p-1} p^{p-1} p^{-(m+r)s} \\ &\quad + p \cdot \sum_{r=1}^{p-2} \sum_{m \geq r} p^r p^{-(m+r+1)s} + (p-1) \sum_{r \geq p-1} \sum_{m \geq p-1} p^{p-1} p^{-(m+r+1)s} \\ &\quad + \sum_{r \geq p-1} \sum_{m \geq p} p^p \cdot p^{-(m+r+1)s} \\ &\quad + p \sum_{r=1}^{\frac{p}{2}} \sum_{t \geq 2} \sum_{m \geq r} p^r \cdot p^{-(m+r+t)s} \\ &\quad + p \sum_{r \geq p+1} \sum_{t \geq 2} \sum_{m \geq p} p^p \cdot p^{-(m+r+t)s} \\ &= \dots \end{aligned}$$

となるわけですがけれど, 結果は非常に複雑なものとなっています。

(II)  $G = \langle \sigma, \tau \mid \sigma^2 = \tau^p = 1, \sigma\tau\sigma = \tau^{-1} \rangle$ ,  $p$  は奇素数

のゼータ関数

ここでは, Bushnell-Reiner [2] の紹介をします。

$\omega$ : 1 の原始  $p$ -乗根

$L := \mathbb{Q}(\omega)$ ,  $K := \mathbb{Q}(\omega + \omega^{-1})$

$S := \mathbb{Z}[\omega]$ ,  $R := \mathbb{Z}[\omega + \omega^{-1}]$

$H := \langle p \mid p^2 = 1 \rangle \cdots$  位数 2 の巡回群

$S \circ H$ : twisted group ring

$\cdots$   $R$ -order in  $K$ -algebra  $L \circ H \cong M_2(K)$ .

まず,  $\mathbb{Q}G \cong \mathbb{Q} \oplus \mathbb{Q} \oplus M_2(K)$  で,  $\mathbb{Z}G$  を含む maximal order は  $\mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z} \oplus M_2(R)$  と同型です。さらに, fibre product,

$$\begin{array}{ccc}
 \mathbb{Z}G & \longrightarrow & S \circ H \\
 \downarrow & & \downarrow \\
 \mathbb{Z}H & \longrightarrow & \overline{\mathbb{Z}}H
 \end{array}
 \quad (*) \cdots \text{を考えます。}$$

—  $\varphi_2(S)$  の計算 —

(\*) を 2 で局所化すると,  $\mathbb{Z}_2 G \cong \mathbb{Z}_2 H \oplus S \circ H$  を得ます。

(これは  $p \neq 2$  による。) ここで,  $S \circ H$  が  $L \circ H$  の maximal  $R_2$ -order である (Auslander-Goldman の仕事による。) ことに注意すると, (I) の結果より,

$$\varphi_2(S) = \zeta_{\mathbb{Z}_2 H}(S) / \zeta_{\mathbb{Z}_2}(S) \cdot \zeta_{\mathbb{Z}_2}(S) = 1 - 2^{-p} + 2^{1-2p}$$

を得ます。

—  $\varphi_p(s)$  の計算 —

(\*) を  $p$  で局所化して,

$$\begin{array}{ccc} \text{fibre product} & \Gamma = \mathbb{Z}_p G & \xrightarrow{f_1} \mathbb{Z}_p H = \mathbb{Z}_p e_1 \oplus \mathbb{Z}_p e_2 \\ & \downarrow f_2 & \downarrow g_1 \quad e_1 = \frac{1-p}{2}, e_2 = \frac{1+p}{2} \\ & \Lambda = S_p^\circ H & \xrightarrow{g_2} \mathbb{Z} H \end{array}$$

を考えます。ここで、 $\Lambda$  は  $L \circ H$  の hereditary order (Auslander-Rim の仕事による。) ですから、 $\pi$  を  $R_p$  の prime element ( $S_p, R_p$  は d.v.r.) とすると、 $|R_p: \pi R_p| = p$  で、 $\Lambda \cong \left\{ \begin{pmatrix} a & \pi b \\ c & d \end{pmatrix} \mid a, b, c, d \in R_p \right\} = T \subset M_2(k)$  となります。

$\Lambda = \{(x, y) \in \mathbb{Z}_p H \times \Lambda \mid g_1(x) = g_2(y)\}$  と表わし、 $\mathbb{Z}_p H$  の full ideal が、 $\mathbb{Z}_p H x$ ,  $x = p^k e_1 + p^l e_2$   $k, l \geq 0$ , で全て得られることと、 $\ker g_2 = (1-w)\Lambda$  に注意すると、(I) と同様に  $\Gamma$  の full ideal は  $\mathbb{Z}_p H$  と  $\Lambda$  の情報から次のように決定されます。

$$I = \Gamma(a, b) + (0, (1-w)J)$$

(i)  $J$  は  $\Lambda$  の full ideal

(ii)  $g_1(a) \in g_2(J)$  となる  $a = p^k e_1 + p^l e_2$

(iii)  $b \in J$  は  $g_2(b) = g_1(a)$  である mod  $J$  の代表.

さらに、 $(\Gamma: I) = p^{k+l} \cdot (\Lambda: J)$  で、与えられた  $J, a$ ,

に対する  $b$  の取りちの数  $N_J$  は,

$$N_J = |J \cap (1-w)\Lambda: (1-w)J| = p^2 / |J + (1-w)\Lambda: (1-w)\Lambda|.$$

これより  $\Lambda$  を  $T$  と同一視して考えます。与えられた  $T$  の元に対応する  $\Lambda$  の元の  $g_2$  による像は、行列の対角成分を  $\text{mod } \pi R_p$  で考えた  $\overline{\mathbb{Z}}$  の元を、 $\mathbb{Z}H$  の  $\mathbb{Z}$ -basis,  $e_1, e_2$  の係数として得られる  $\mathbb{Z}H$  の元に一致します。

さて、 $T$  の full ideal の同型数の代表は

$$T, \pi M_2(R_p), K = \left\{ \begin{pmatrix} \pi^a & \pi^b \\ c & d \end{pmatrix} \mid a, b, c, d \in R_p \right\}$$

となっていることから、 $T$  の full ideal は次の 3 type で完全に決まります。

$$(i) \quad J = TX, \quad X \in T^* \setminus T \cap GL_2(K)$$

$$(ii) \quad J = M_2(R_p)X, \quad X \in GL_2(R_p) \setminus \left\{ \begin{pmatrix} a & \pi b \\ c & \pi d \end{pmatrix} \mid a, b, c, d \in R_p \right\} \cap GL_2(K).$$

$$(iii) \quad J = KX, \quad X \in GL_2(R_p) \setminus M_2(R_p) \cap GL_2(K)$$

さらに、各々の type で、下に示す表のように、代表  $X$  の取り方が決まります。同時に  $g_1(a) \in g_2(J)$  となる、 $a$  も決まり、 $(1-\omega)\Lambda = \text{rad } \Lambda$  ですから与えられた  $J$  に対する  $N_J$  も決定されます。(ここで  $R_p$  の元の ex. val. を表わします。) 表をもとに  $\varphi_p(S)$  を計算すると、

$J$	$X$	$ T:J $	$N_J$	$a$
$TX$	$\begin{pmatrix} 0 & \pi^n \\ \pi^m & d \end{pmatrix}$ $\begin{matrix} m \geq 0 \\ n \geq 1 \end{matrix}$ $d \in R_p \setminus \pi^n$	$p^{2(m+n)}$	$P$ if $v(d)=0$ $P^2$ if $v(d)>0$	$k \geq 1, l \geq 0$ $k, l \geq 1$
$TX$	$\begin{pmatrix} \pi^m & \pi b \\ 0 & \pi^n \end{pmatrix}$ $\begin{matrix} m \geq 0 \\ n \geq 0 \end{matrix}$ $b \in R_p \setminus \pi^n$	$p^{2(m+n)}$	$1$ if $m=n=0$ $P$ if $\begin{cases} m=0, n>0 \\ n=0, m>0 \end{cases}$ $P^2$ if $m, n>0$	$k, l \geq 0$ $k \geq 0, l \geq 1$ $k \geq 1, l \geq 0$ $k, l \geq 1$
$M_2(R_p)X$	$\begin{pmatrix} \pi^m & \pi b \\ 0 & \pi^n \end{pmatrix}$ $\begin{matrix} m \geq 0 \\ n \geq 1 \end{matrix}$ $b \in R_p \setminus \pi^{n-1}$	$p^{2(m+n)-1}$	$P$ if $m=0$ $P^2$ if $m>0$	$k \geq 0, l \geq 1$ $k, l \geq 1$
$KX$	$\begin{pmatrix} \pi^m & b \\ 0 & \pi^n \end{pmatrix}$ $\begin{matrix} m \geq 0 \\ n \geq 0 \end{matrix}$ $b \in R_p \setminus \pi^n$	$p^{2(m+n)+1}$	$P$ if $n=0$ or $v(b)=0$ $P^2$ if $n, v(b)>0$	$k \geq 1, l \geq 0$ $k, l \geq 1$

定理 ( Bushnell-Reiner [2] )

$$\zeta_{\mathbb{Z}G}(s) = \zeta_2(s) \cdot \zeta_p(s) \cdot \zeta_{\mathbb{Z}}(s) \cdot \zeta_{\mathbb{Z}}(s) \cdot \zeta_R(2s) \cdot \zeta_R(2s-1)$$

$$\zeta_2(s) = 1 - 2^{-s} + 2^{1-2s}$$

$$\zeta_p(s) = 1 + (p-1)p^{-2s} + 2 \cdot p^{2-3s} + (p-1)p^{1-4s} + p^{2-6s} \quad \dots$$

文

献

Bushnell-Reiner [1] Zeta functions of arithmetic orders  
and Solomon's conjecture. Math. Z. 173, 135-161 (1980)

Bushnell-Reiner [2] Zeta functions of hereditary orders  
and integral group ring. Vis. Scholar's Lec.-1980, natl. (1981)

広中 [1] Zeta functions of integral group rings of meta-  
cyclic groups. TSUKUBA J. Math. Vol.5, No.2 267-283 (1981)

Reiner [1] Zeta functions of integral representations.  
Comm. algebra 8(10), 911-925 (1980)

Solomon [1] Zeta functions and integral representation  
theory. Advance in Math 26, 306-326 (1977)